

キリストの空中再臨と教会の携挙 (その二)

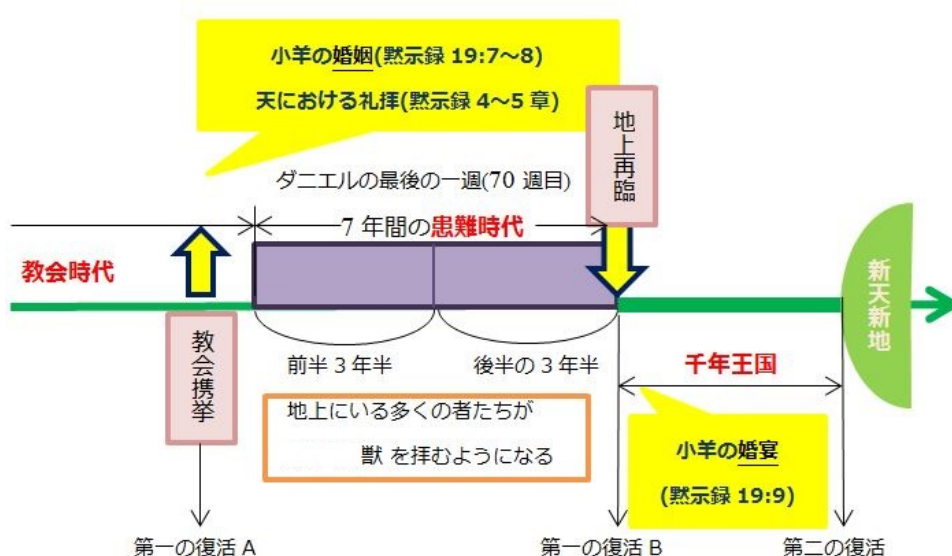
—教会の「携挙」についての聖書的根拠—



ベレーシート

●前回は、シリーズ「キリストの再臨と終末の預言」の第一回目として「キリストの空中再臨と教会の携挙」について学びました。このことはとても重要な教えであり、キリストを信じる者にとって大きな慰めとなります。第二回目では、この「携挙」についての教えを、さらにいろいろな聖書のことばによって補強したいと考えています。

●「けいきよ」ということばを国語辞典で調べるならば、「軽挙」ということばしかありません。その意味は「軽々しいこと、軽々しいふるまいをすること」とあります。その意味の「けいきよ」ではありません。聖書の「けいきよ」は「携挙」と表記します。この用語は神学用語(教理用語)です。また、「携挙」ということば自体は聖書にはありませんが、教会が天に一挙に引き上げられ(携え挙げられ)て、空中で主と会うということを意味する用語です。使徒パウロは、テサロニケの教会の人々に対して、このことについて「知らないでいてもらいたくありません。」(Iテサロニケ 4:13)と記しています。なぜなら、キリストを信じる者にとって、「携挙」はぜひとも知っておかなければならない重要、かつ基本的な教えだからです。



●神のご計画のマスタープランにおいて、七年間におよぶ最後の一週があります(ダニエルの七十週の預言の最後の一週のこと)。この期間は黙示録で登場する「底知れぬ所から上って来る獣」(11:7)が支配する最後の一週で、キリストを拒絶する世界に対して神の怒りが激しく注がれる時代です。時間的には七年間と短いのですが、その期間は、数多くの天変地異が起こり、「獣」による未曾有の、桁違いの大患難がもたらされる神の怒りの時です。なぜ短い(七年)のかといえ、イスラエルの民がその試練—「ヤコブの苦難の時」(エレミヤ 30 章 7 節)と呼ばれている—から救われるためです。

●イエシュアも、マタイ 24 章 21~22 節で、預言者ダニエルによって預言された「荒らす憎むべき者」が聖なる所に立つ時、つまり獣がその本性を表すとき、「そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。もし、その日数が少なくされなかつたら、ひとりとして救われる者はないでしょう。しかし、選ばれた者(ユダヤ人、イスラエルの民のこと)のために、その日数は少なくされます。」と語られました。その耐えがたき神の怒りを終結させるために、キリストは地上再臨されますが、幸いなことに、キリストを信じる者たち(教会)はその患難時代が来る前に天に携え上げられるのです。しかもその時は何の前触れもなく、突然にやってきました。この預言は、キリストにあって死んだ(眠った)人々にとっても、またその時にキリストにあって生きている人々にとっても、喜びの時です。なぜならそのときこそが花婿が花嫁である教会を迎えに来る時だからです。ですから、この携挙のことを知り、目を覚ましている必要があるのです。

1. 神の怒りによる大患難から救われるための「携挙」

●キリストを信じる者は患難時代における、目に見える神の怒りから救われています。すでにキリストを信じた時点で霊的には神の怒りから救われているのですが、七年間の患難時代の目に見える出来事としての神の怒りからも救われるのです。そのことについて、いくつかの聖書の根拠を挙げたいと思います。

(1) ローマ書 5 章 9 節

【新改訳 2017】

ですから、今、キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです。

(2) I テサロニケ 1 章 10 節

【新改訳 2017】

御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを、知らせているのです。この御子こそ、神が死者の中からよみがえらせた方、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスです。

(3) I テサロニケ 5 章 9 節

【新改訳 2017】

神は、私たちが御怒りを受けるようにはなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださっ

たからです。

● Iテサロニケ 1 章 10 節にもあるように、初代教会は大患難という主の怒りが来る前に、「御子が天から来られるのを」、今日か、今日かと待ち望んでいたのです。「一挙に引き上げられ、空中で主と会う」(Iテサ 4:17) 携拳を待っていたのです。初代教会(パウロの再臨待望)は「携拳待望」であったのです。それゆえ、初代教会の人々は、「主はもうすぐ来られます」「主よ。来てください。」を意味する「マラナ・タ」ということばで、挨拶を交わしていたのです。今日、この挨拶用語を回復しなければなりません。

●ちなみに、「マラナ・タ」はアラム語です。「主よ。来てください」と訳されていますが、正確には「われらの主は来られる」とも「われらの主よ。来てください」とも訳されます。アラム語の「主」を意味する「マーレー」(מַלְאִי)の複数形「マラー」(מַלְאִי)の最後の「ラー」と「来る」を意味する「アター」(אָתָּא)の最初の「ア」がくっついて「ナ」と発音し、「マラナ」と表記されます。最後の「タ」を「サ」と発音して「マラナ・サ」と表記されることもあります。英語表記の「th'a」を「タ」と発音するか、「サ」と発音するかの違いです。

(4) ルカの福音書 21 章 36 節

【新改訳 2017】

しかし、あなたがたは、必ず起こるこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈っていなさい。

●この「必ず起こるこれらすべてのこと」とは、「獣」による大患難のことです。

2. 翻訳的見地(原語)からの「携拳」の根拠

(1) IIテサロニケ 2 章 3 節 — 「背教」ではなく、「離れること」—

【新改訳 2017】IIテサロニケの手紙 2 章 1～4 節

- 1 さて兄弟たち。私たちの主イエス・キリストの来臨と、私たちが主のみもとに集められることに関して、あなたがたにお願いします。
- 2 霊によってであれ、ことばによってであれ、私たちがから出たかのような手紙によってであれ、主の日がすでに来たかのように言われるのを聞いても、すぐに落ち着きを失ったり、心を騒がせたりしないでください。
- 3 どんな手段によっても、だれにもだまされてはいけません。まず背教が起こり、不法の者、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないのです。
- 4 不法の者は、すべて神と呼ばれるもの、礼拝されるものに対抗して自分を高く上げ、ついには自分こそ神であると宣言して、神の宮に座ることになります。

●テサロニケの手紙第二がなぜ書かれたのかと言えば、「主イエス・キリストの来臨」〔すなわち、キリストの再臨〕と、「私たちが主のみもとに集められること」〔すなわち、携拳〕に関して、テサロニケ教会の中に混乱

が生じていたからです。換言すると、テサロニケの教会の中に、聖徒を天に引き上げるためのキリストの空中再臨と、大患難期の後に「不法の者」(=獣)を滅ぼすために再臨されるキリストの地上再臨とを混同する者たちが現われたことで、それを明確にするためにパウロはこの手紙を書いたのです。

●テサロニケの教会に対して、「主の日」が来たということを聞いても、落ち着きを失ったり、心を騒がせたりしないように、だまされないようにしてください、とパウロは言っています。つまりパウロは、「主の日」が来るには、順序があるということをここで教えようとしているのです。その順序とは、

- ① 「まず背教が起こる」こと。
- ② 「不法の人(滅びの子、獣)」が現われること。
- ③ そして「主の日」、つまり、キリストの再臨。

●しかし、ここで厄介な問題は「まず背教が起こり」と訳されていることです。この「背教」と訳された原語は「ヘー(ἡ)・アポスタシア(ἀποστασία)」です。アポスタシアは二通りの訳があります。ひとつは「背教」とか「反乱」と訳し、もうひとつは「出発」「離別」と訳します。この名詞「アポスタシア」の動詞である「アフイーミ」(ἀφίστημι)を調べると、15回のうち3回は「背教する」と訳されますが、あとの12回は「去る、離れ去る」と訳されています。したがって、Ⅱテサロニケ2章4節の「背教」は、むしろ「出発」とか「移動」と訳すべきで、山岸登氏も、「冠詞付の離別」とは、すなわち「携拳」を意味していると述べています。また、2章1節に「私たちが主のみもとに集められること」とありますから、ここは「(主の日が来る前に)まずその離別(携拳)があり、その次にあの不法の人、すなわち「滅びの子」が現われなければならないからです。」と訳すべきだとしています。聖徒を天に引き上げるために来るキリストの「空中再臨」と、不法の人を滅ぼすために来る「地上再臨」とを混同してはならないのです。明瞭に、区別されなければならないのです。

●「アポスタシア」についてのこの見解は、英訳聖書の翻訳の歴史においても、KJV 訳以来、「離れる」「離れること」と訳されて来た、とエマオ出版訳の山岸氏は述べています。もしこの見解が正しければ、**患難期前携拳説**の有力な聖書の根拠となります。

(2) ヨハネの黙示録 3章 10 節

【新改訳 2017】ヨハネの黙示録 3章 10 節

あなたは忍耐についてのわたしのことばを守ったので、地上に住む者たちを試みるために全世界に来ようとしている試練の時には、わたしもあなたを守る。

●この箇所での翻訳上の問題は、「全世界に来ようとしている試練の時には」の「時には」という訳です。「全世界に来ようとしている試練」とは、「獣」による未曾有の大患難のことです。新改訳ではその「試練の時には」と訳しています。原文では「～の中から外へ」を意味するギリシア語の「エク」(ἐκ)が使われているため、「患難時代の中から」と解釈している人々がいます。しかし、山岸氏は「エク」(ἐκ)は「分離」を表わすために用いられているとして、ヨハネ 17章 15 節、Ⅰコリント 9章 19 節、Ⅱペテロ 2章 21 節、そして特にⅠテサロニケ 1章 10 節を例に挙げています。「試練の時には」と訳されると、キリスト者もその試練の中にいることとなります。しかし「試練の時には」に「分離」ニュアンスがあるとすれば、「**大患難前携拳説**」と

なり、教会がその試練(大患難)の前に分離されることで救われることとなります。しかしその「分離」のニュアンスを外すと、「**大患難後携拳説**」となり、その試練(大患難)の中に置かれた教会は、その中から救われるということ

になります。このあたりの解釈がとても難しいところです。しかし、これまでに挙げた聖書のことばとの整合性を考えるならば、前者の「**大患難前携拳説**」の方がきわめて自然といえます。

●主にある者も「世にあっては患難があります」(ヨハネ 16:33)と言われましたが、ここで問題となっているのはそのような一般的な患難とは異なり、これまでにない未曾有の神のさばきとしての大患難のことであり、その目的も神の選びの民に対する最後のあわれみの時としての精練的な目的をもった試練なのです。そうした精練的試練にキリストの花嫁である教会が遭う必要があるのでしょうか。むしろ花嫁は主の空中再臨と携拳があることを信じて、ひたすら緊迫感を持って、目を覚ましていることが求められているように思われますし、もし「携拳は獣が現われてから」という時間軸があるとすれば、携拳の突如姓は喪失してしまいます。

3. 携拳の教えは私たちの生き方を清くする

●携拳の教えは、私たちの生き方を変え、キリストとのかかわりを決定的に新しくします。

ヨハネの手紙第一 3章 2~3節を見てみましょう。

【新改訳 2017】 I ヨハネの手紙 3章 2~3節

2 愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。

しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。

3 キリストにこの望みを置いている者はみな、キリストが清い方であるように、自分を清くします。

●2節の「キリストが現れたときに」とは、キリストの空中再臨と携拳のことです。そのとき、「私たちはキリストに似た者となる」のです。そして3節の「キリストにこの望みを置いている」も空中再臨と携拳に対する望みです。この望みをいだく者はみな(例外なく)、「キリストが清い方であるように、自分を清くします」と記されています。つまり、キリストの空中再臨の希望をしっかりと抱く者は、例外なく「自分を清くする」のです。

●「清くします」と訳された原語は「ハグニゾー」(ἀγνίζω)で、新約では8回使われています。その形容詞の「ハグノス」(ἀγνος)も同じく8回。動詞にしても、形容詞にしても、この言葉は**花婿と花嫁、あるいは夫と妻とのうろわしい関係を表わしています**。「清くする」とは、夫となる花婿のキリストに対するかかわりにおいて、「純潔」「貞潔」「従順」な関係を意味します。そこには二心があってはなりません。それは妻が夫に対して示す純真な生き方でなければなりません。

●「キリストが清い方である」とは、自分の妻に対する「純真」を意味します。それと同様に、妻となる教会(私

たち)も、夫となるキリストに対して前もって「清く」しなければならないのです。なぜなら、花嫁であるキリストが花嫁である私たちを天から突然のように迎えに来られるからです。いつ来られても良いように、私たちはこの教え(真理、望み)を知り、信じて、従って生きている必要があります。それは当然のごとく、自分の心を変え、また生き方を変えることになるのです。おそらく、携挙の時が近づくと、花嫁を整えるべく神からの働きかけが顕著になされると信じます。おそらく、それは御霊によるみことばの開眼という形でなされるはずで、それゆえ、「御霊と花嫁も言う。『来てください。』」と(黙示録 22:17)。

●私たちはすでにキリストを信じることによって花嫁となる約束をしているのです。結婚式はまだですが、キリストの妻となる婚約をしています。その夫となるべき方は必ず来られます。そして迎えに来られる時が結婚式です。その時まで私たちはワクワク、ドキドキ、イキイキしながら、清純な心をもって、花嫁を待ってなければなりません。もし私たちのうちに「二心」があるならば、それを捨てなければなりません。

●「携挙」の教えは必ずや私たちの生き方を変え、確実にキリストとのかかわりを新しくします。ライフスタイルを一新させます。携挙の約束と清い生き方には密接な関係があるのです。I テサロニケ 4:3~8 を参照。

4. 携挙後の天上での礼拝の幻(ヨハネの黙示録 4~5 章)

●キリストが空中再臨される時、すでにキリストにあって眠っている者は新しい朽ちないからだを与えられてよみがえります。またそのときに生きている者は彼らと一緒に雲の中に一挙に引き上げられて空中で主と会います。余談ですが、「雲の中に引き上げられる」とあるので、空中再臨の時は、「晴れの日ではなく、曇りの日だ」と思わないでください。この「雲」とは「**栄光の雲**」のことで、「**シャハイナ・グローリー**」という特別な主の栄光の現れを表しています。その栄光の中に教会が引き上げられるのです。ちなみに、イエシュアの生涯の中に「シャハイナ・グローリー」が「雲」によって表わされている箇所があります。

⇒ルカ 9:28~36(特に 34~35 節)、使徒 1:9~11 参照。

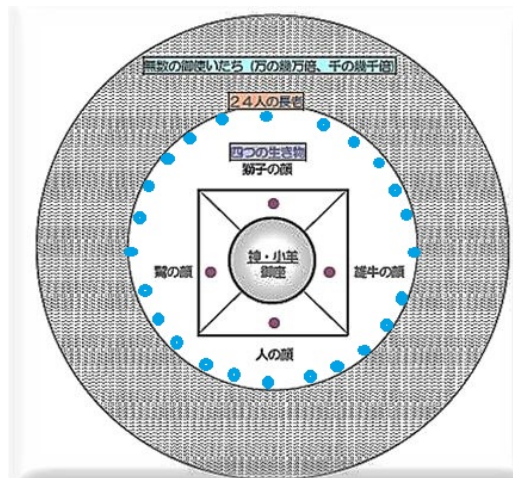
●キリストの花嫁である教会は空中の雲の中に引き上げられたあと、花嫁なる主との婚姻のために天に行きます。そのために主が迎えに来られたのですから。そして天において小羊の婚姻(婚礼)が行われると考えられます。そこでヨハネの黙示録 4~5 章に記されているような礼拝、つまり、多くの御使いらとともに、御座に着いておられる方と小羊に礼拝をささげると考えられます。そこがヨハネの福音書 14 章 1 節に言われている「父の家」であり、そこには立派な「住まい」がたくさんあるのです。その父の家で主とともに住むのです。つまり親しい交わりをするのです。しかしその交わりは私たちが考えているようなものではありません。愛すべきうるわしい方を礼拝するという意味での交わりです。

●ヨハネの黙示録 7 章からは小羊が七つの封印(神の怒りの封印)を一つずつ解いていきます。そこでは「教会時代」の後に来る七年間の「患難時代」の出来事が啓示されています。この「患難時代」に起こる出来事については、別の時に改めて学びたいと思います。今回は、ヨハネの黙示録 4~5 章に記されている「天上の礼拝」の様子をいくつかを覗いてみたいと思います。

●「天に一つの開いた門」を御霊によって見たヨハネは、その開かれた門を通して、「この後、必ず起こること」を示されました。ヨハネがそこで見たのは、いまだかつてだれも見たことのない天にある礼拝の光景でした。

【新改訳 2017】ヨハネの黙示録 4 章 1～11 節

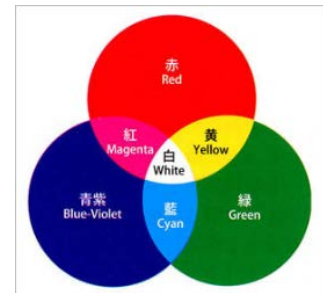
- 1 その後、私は見た。すると見よ、開かれた門が天にあった。そして、ラッパのような音で私に語りかけるのが聞こえた、あの最初の声があった。「ここに上れ。この後必ず起こることを、あなたに示そう。」
- 2 たちまち私は御霊に捕らえられた。すると見よ。天に御座があり、その御座に着いている方がおられた。
- 3 その方は碧玉や赤めのうのように見え、御座の周りには、エメラルドのように見える虹があった。
- 4 また、御座の周りには二十四の座があった。これらの座には、白い衣をまとい、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老たちが座っていた。
- 5 御座からは稲妻がひらめき、声と雷鳴がとどろいていた。御座の前では、火のついた七つのともしが燃えていた。神の七つの御霊である。
- 6 御座の前は、水晶に似た、ガラスの海のようにであった。そして、御座のあたり、御座の周りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。
- 7 第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は飛んでいる鷲のようであった。
- 8 この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その周りと内側は目で満ちていた。そして、昼も夜も休みなく言い続けていた。「聖なる、聖なる、聖なる、主なる神、全能者。昔おられ、今もおられ、やがて来られる方。」
- 9 また、これらの生き物が栄光と誉れと感謝を、御座に着いて世々限りなく生きておられる方にささげるとき、
- 10 二十四人の長老たちは、御座に着いておられる方の前にひれ伏して、世々限りなく生きておられる方を礼拝した。また、自分たちの冠を御座の前に投げ出して言った。
- 11 「主よ、私たちの神よ。あなたこそ栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方。あなたが万物を創造されました。みこころのゆえに、それらは存在し、また創造されたのです。」



●「御座」ということばはヨハネの黙示録の中では 40 回以上も使われています。「御座」は御父が万物を支配し治められる玉座です。ちなみに、黙示録では「御父」とか「御子」ということばは使われません。「御座」に一番近い所には「四つの生き物」がおり、絶えず「聖なるかな、聖なるかな・・・」と賛美をささげています。これら四つの生き物は、神を賛美するために、特別に造られた天上の被造物です。その「四つの生き物」が御座に着いておられる方に賛美をささげるとき、その外側にいる「二十四人の長老」たちが御前にひれ伏して礼拝します。しかも特筆すべきことは、神から与えられた自分の「金の冠」を投げ出してまで、「主よ、私たちの神よ。あなたこそ栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方。」と賛美礼拝しています。この「二十四人の長老たち」こそ、地上から贖われた人間(ユダヤ人と異邦人からなる教会)の代表と考えられます。そして、その外側

に「無数の御使いたち」が御座を取り囲んで礼拝しています。

●黙示録 4 章には「その方は碧玉や赤めのうのように見え、御座の周りには、エメラルドのように見える虹があった」と記しています(3節)。碧玉は青、赤めのうは赤、エメラルドは緑です。神は光の中に住んでおられます。光の三原色(青・赤・緑)が一つに集まる所は「白」です。これが色であれば一つになる部分は黒ですが、光の場合は白です。すなわち、神の本性は「白い光」で見えないのです。御座の中央は白い光で輝いているのです。そこに神がおられます。



ベアハリート

●私たちが知らなければならないことは、教会の時代はキリストの空中再臨と教会の携挙によって突然に終わりを告げるということです。患難時代の後に来るキリストの地上再臨の時には多くのしるしと前兆が伴います。しかしキリストの空中再臨と教会の携挙前にはそのような前兆はありません。突然に来るのです。ですから、いつそれが起こってもいいような生き方をする必要があります。

●**教会の携挙は患難時代が始まる前に起こります**。信じがたいことですが、このことをしっかり信じて生きることが大切です。携挙の後に来る患難時代の苦しみを知る時、携挙は私たちに大きな慰めと励ましを与えます。今は「恵みの時、救いの時」なのです。ですから、「私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めましょう。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。」(Ⅱコリント 4:18)。「天からの住まいを着る」(Ⅱコリント 5:4)ことを私たちの唯一の望みとして、「内なる人」(キリストによって新しくされた人)は、日々新たにされて歩みたいものです。**マラナ・タ!!**